

楡の会発達研究センター報告、その29（2013年7月）

楡式療育学の原理：“好い事作り療法”

～図星を言う、分かってもらえてる感醸成、発達の最近接領域見つけ、真似し易い手本呈示～

楡の会こどもクリニック

院長 石川 丹

“療福”

社会法人・楡の会の特徴の一つは福祉法人の中に診療所があり、医療と福祉を融合して実践している点です。略して言えば“療福”です。

当法人の業務は障害児者への福祉サービスですが、その原点を重症心身障害児への“療福”に置いています。重症心身障害児へ関わりに原点を置いている訳は、最も障害の重い人たちへの“療福”が上手く行けばそれ程重くない人々の場合はより容易に成る、と考えているからです。換言すると、最も重度障害の人の生活が楽に成ればそれほど重くない人の生活はもっと楽に成る、です。

療育

当法人の活動の基本中の基本は医学的治療と教育の融合実践としての療育です。療育と言う語は100年程前にウィーンの小児精神科医 Heller が初めて記述した治療教育学に基づいています。

医学的治療では古くから身体と心の両方への治療が施されて来ました。

医師が黙って薬を投与したら身体レベルの治療ですが、「良い薬を上げましょう」「この薬で治しましょう」「飲めば良くなりますよ」などと声掛けしたら身体レベルに心理レベルの治療が加わった事に成ります。これは“病は気から”という^{ことわざ}の^{やまい}実践です。“病は気から”という言葉は、どんな良い治療も本人に「治ろう」という意欲が無ければ効いて来ない、という意味です。ですから、「良い薬を上げましょう」「この薬で治しましょう」「飲めば良くなりますよ」と言う声掛けは患者さんを励まして病気と闘う気持ちを醸し出すための心理療法に成っているのです。こうした心理療法が古くからなされて来たのは医学的治療は元々個々の患者さんへの個別対応つまりオーダーメイドの治療法だからです。

医師のみならず看護師、薬剤師、理学療法士、作業療法士、言語療法士など医学的治療者は各職種特有の身体的治療のための専門的職能に加えて、「こうすると良くなりますよ、楽になりますよ」などと励ましの言葉掛けをする形で心理療法をしています。医学的治療実践には心理療法が必須なのです。

一方、教育的関わりの中で保育士や教諭が子どもに手順を説明しながら手本をやって見せる時、「～したら^{うま}上手く行きますよ」と声掛けして「やってみよう」というやる気を作れ

たら、教育と心理療法を同時に実施した事に成ります。教育の中にも元々心理療法が存在していましたが、従来の集団教育中心の教育の中で、最近是个の尊重が強調される特別支援教育が出現して来ましたが、これは教育界でも個別対応の心理療法を一層重要視されるようになった事を物語っています。

以上に説明したように心理療法は心理士だけがするものではありません。当法人職員は心理療法の研鑽に励み、各自の職能と心理療法を兼ね備えた上で、療育を実践する療育士として日々活動しています。

楡式療育学の原理

楡の会療育士としての基本的療育方法は、第一に子どもの心の中に受容されている事の自覚、即ち“分かってもらえてる感”を作る事、第二には子どもにとって好ましく真似し易い手本を呈示する事です。

受容は心理療法の最も重要な基本概念です。心理療法を求めて治療者を訪れる人をクライアントと言います。治療者がクライアントの訴えや話しを傾聴し、クライアントの心を受け入れ、認め、クライアントの心と共感する事で受容が達成されます。クライアントが治療者に受容されているという実感を持ってもらう事が心理治療の成果に繋がるのです。

大人は相手の目の色を読み相手が自分を受容しているかどうか判断できますが、子どもは他者の目の色を読んで相手の心の内を理解する事に未熟です。ですから、治療者による傾聴という行動と共感という感情表現だけでは、子どもの心の中に受容されている事の自覚、つまり“分かってもらえてる感”を醸し出すことは難しいのです。子どもに対しては、治療者が傾聴と共感以上の表現で積極的に受容している事を伝える事が必須です。

子どもに受容自覚、つまり“分かってもらえてる感”を促す方法は“凶星を言う”です。

子どもの気持ちを治療者や親が推測してズバリ言い当てる事が“凶星を言う”です。

例えば、子どもが嬉しがってたら「嬉しいね」、怒ってたら「怒ってる」、悔しそうに泣いてたら「悔しい」、何か出来たら「やったあ」、はにかんでいたら「恥ずかしい」、固まってしまったら「困ったあ」、片付けしようとしなかったら「お片付けしたくないんだ」、怒って物を投げたら「怒った」「投げた」「投げたいんだ」、人を叩いたら「叩いた」「叩きたいんだ」、走り出したら「走った、走りたいんだ」などと子どもの気持ち、意図、行動を言語化して言って聞かせる事が“凶星を言う”です。

子どもに親しく関わる人が日頃から“凶星を言う”をしていると、子どもの心の中に「凶星を言ってくれる人は僕の気持ちが分かっている人だ。僕の事を分かってくれてるんだから良い人だ、味方だ、良い人味方がいるから安心だ」と“分かってもらえてる感”と安心が拡がって受容が達成されます。

子どもに“分かってもらえてる感”“良い人だ味方だ感”を作れば、分かってくれている人なんだからその人の言う事なら聞こうという意欲が湧き上がり、その人に向かって心を開こうとする気持ち、つまり聞く耳、ダンボの耳を作る事が出来ます。

例えば、一緒に歩いていた子が急に走り出したら、「走らないよ」と直ぐに否定的に言う

のが、つまりダメ出し先行が日本の伝統的な普通の躰・教育ですが、そうではなく「走りたいんだ、ゆっくりね」と、否定先行をせずに凶星を言って聞く耳を作っておいてからやって欲しい好ましい行動を指示した形に成るので、ダメ出しされたら生じる^{はず}の反発する気持ちが湧き上がらずに「ゆっくりね」という誘いにスーッと乗って走るのを止めてしまうように成ります。

療育場面でも“凶星を言う”をした後に手本を呈示すると聞く耳が出来ていますから、治療者や大人からの「～やって見よう」「～して」「～しなさい」と言う言葉掛けや指示に子どもが乗り易くなり、指示が通り易く成るので療育効果が生じる事に成ります。子どもが「この人、分かってくれてない」と思ってしまったら、子どもの心の中に大人の言葉を聞き取ろうとする意欲、つまり耳は無くなってしまいます。

さて、ヴィゴツキーという心理学者は子ども自身が一人ではできないが大人が一部手伝えれば出来てしまう発達段階を発達の最近接領域と称しました。アフリカの草原で新鮮な草を求めて移動するヌーの群れの先頭集団は川を渡る時に川幅の最短の所を渡るそうです。これは長く川に浸かっていると鱶に食べられてしまうからだそうですが、ヌーは発達の最近接領域を知っていると言う事も出来ましょう。発達の最近接領域は大人の人にもあります、オリンピック選手だってあります。

発達の最近接領域は子どもにとってはハードルが低いと思える所、やれそうと思えている^{はず}の所です。ですから、個々の子どもの発達の中にこの発達の最近接領域を容易に見つけられる人が優れた療育者なのです。楡の会療育士は子どもの発達の最近接領域を見つける事に長けています。大人がちょっと手伝えれば出来る^た所の所を見つけておいて、子どもにとってやり易^{やす}そうに思える手本を呈示すれば、子どもの心にやる気を育てられてチャレンジ行動が増えます。子どもにとってやり易そうと思える手本は子どもにとっては好ましい手本です。手本の無い学習はありません。学習が進むように凶星のために肝心なのは子どもが真似し易そうと思えるような手本、つまり子どもにとって好ましい手本を示す事です。手本を示しても子どもが「そんなの無理、出来そうもない」と思ってしまったら学習も療育は頓挫してしまうのです。

4 ステップ法～凶星を言う、分かってもらえてる感醸成、発達の最近接領域見つけ、真似し易い手本呈示～

子どもに“凶星を言う”“分かってもらえてる感を作る”“発達の最近接領域見つけ”“真似し易い手本の呈示”の4つのステップが楡式療育学の真髄です。

凶星を言って、この人味方だと言う気持ちとダンボの耳を作っておいて、一方ではその子の発達の到達段階を把握して“発達の最近接領域見つけ”をしてから、真似し易く好ましい手本を示すのが楡式療育です。

“好い事作り療法”

上記の4ステップ法を真髄とする楡式療育は子どもにとってやり易いようにやり易いように配慮しながら真似し易い手本を示す事です。これは本人にとって好ましくて良い事で

すから“好い事作り療法”と称しています。

“好い事作り療法”は困った事や困っている事の心理療法的解決法ですから、子どもにも大人にもどんな人にも有効であります。

楡ブランド

当法人のセールスポイントの一つである“好い事作り療法”は、商品に例えるなら、楡ブランドと称せられるものです。

利用者さんの福祉向上を図るのが福祉法人の役目ですが、福祉という言葉の「福」も「祉」もともに、幸せ、と言う意味です。ですから、当法人の福祉サービスは利用者さんの“幸せ作り”を応援している事に成っている、と確信しています。